

一八世紀朝鮮知識人の清朝認識

— 金昌業の思想を中心に —

李 豪 潤

一．はじめに

老稼齋・金昌業（一六五八～一七二二）は、一六三六年清朝の朝鮮侵攻（丙子胡乱）の際、瀋陽に人質として連行された金尚憲（一五七〇～一六五二）の曾孫で、朝鮮王朝後期の名門巨族である安東金氏の一員として生まれた。彼は、一七二二年清朝の第四代皇帝の康熙帝（位一六六一～一七二二）が治めていた一七二二（肅宗三八）年、冬至使兼謝恩使の正使の金昌集（一六四八～一七二二）の打角（＝自辟軍官＝子弟軍官）として清朝を訪れ、『稼齋燕行録』^①という使行録を残した。『稼齋燕行録』は、豊富な内容や記録により、一般的に朝鮮王朝後期の四大『燕行録』と呼ばれている。朝鮮王朝後期の四大『燕行録』とは、金昌業の『稼齋燕行録』、洪大容（一七三一～一七八三）の『湛軒燕記』・『燕行雜記』（英祖四一年、一七六五年）、朴趾源（一七三七～一八〇五）の『熱河日記』（正祖四年、一七八〇年）、金景善（一七八八～一八五三）の『燕軒直指』（純祖三二年、一八三二年）^②をいう。こうした『燕行録』の中、洪大容・朴趾源など「北学派」の使行録は「実学研究」と連動し、膨大な研究成果を残している一方、四大『燕行録』の中、最も早い時期に記録され、その後の『燕行録』の記録に大きい影響を及ぼした金昌業の『稼齋燕行録』に対する研究は相対的に乏しい。

金昌業の『稼齋燕行録』に対する従来の研究は大きく、金昌業の中国

認識、つまり「対清認識」に関する研究、『稼齋燕行録』の文学的特徴に対する研究、そして金昌業の『稼齋燕行録』に記されている清朝の文化に関して分析した研究に分けられる。こうした先行研究の中、金昌業の対清認識に関する研究は、「金昌業、洪大容、朴趾源の中国認識の比較」^④、金昌業の「明清交替期の戦争現場に対する記録」^⑤、「清朝の都・北京見聞」^⑥、「清朝文士との交流」^⑦、「清朝皇帝の康熙帝観」^⑧、「清朝の中国統治に対する認識」^⑨などがある。ところで、こうした金昌業の対清認識に対する研究は金昌業の「清朝に対する優越認識」を分析した研究が多く、金昌業の対清観が「朝鮮中華主義」から脱殻できなかつた限界を持つと指摘され、こうした分析は一八世紀に登場する「北学論」への肯定的評価につながっている。もちろん金昌業の『稼齋燕行録』には「朝鮮中華主義」に関する記録、特に清朝の弁髪や胡服に対し、朝鮮の衣冠文物へのプライドの表現が多く記録されているのは間違いない。しかしながら、金昌業の対清観を見ると「朝鮮中華主義」的な認識はあるものの、清朝の文化や礼楽文物に対し高い評価を下す、いわゆる「北学論」の萌芽的なものも示している。従って、本稿では金昌業の対清使行の記録である『稼齋燕行録』をテキストに「朝鮮中華主義」や「北学論」の登場を予告する金昌業の対清認識を調べていこうと考える。

二. 金昌業と『稼齋燕行録』

金昌業は字は大有、号は稼齋または老稼齋、本貫は安東で、一六三六年の清朝・太宗の朝鮮侵攻（丙子胡乱）の際、決死抗戦を主張した代表的な強硬派（≡斥和派）で、終戦後清朝の瀋陽に人質として連行された金尚憲が彼の曾祖父で、朝鮮王朝後期の名門巨族である安東金氏の一員として生まれた。^⑩ 金昌業が参加した一七二二年の冬至使兼謝恩使行は、正使・金昌集、副使・尹趾仁、書状官・盧世夏などの三使が使行団を率いる五四一人の大規模の使行団であった。この使行に動員された馬匹は四三五頭で、これもまた先例のない大きな規模で、平常の対清使節団が使行団約二五〇人、馬匹約二〇〇頭であることと比べると、通常の規模より約二倍の規模の使行といえる。同じ時期の朝鮮王朝から徳川日本に派遣された一七二一年の通信使や、琉球王国から江戸幕府に派遣された一七二〇年の琉球使の規模も史上最大であったが、この時期の大規模の使行団の派遣は、東アジア世界の共通のことであった。これは三藩の乱の鎮圧（一六八二）および台湾の鄭氏の帰府（一六八三）による一六八四年の清朝の展界令と、これによる交易の増加と関係があると考えられる。実際に、清朝の展界令以後、長崎における対中国の貿易は急増し、徳川幕府が金・銀の流出を防ぐため貿易制限策を施行したこともある。^⑪

金昌業は、朝鮮王朝第二〇代国王の景宗（位一七二〇～一七二四）の際、朝鮮王朝の最高官職である領議政の老論派の領首であり、一七二二年の使行正使だった金昌集の子弟軍官として対清使行団に参加した。子弟軍官とは、使行団の有力者の親戚の中で、私費参加の人を指すことで、北学派の洪大容、朴趾源も子弟軍官として対清使行に参加し、清朝の新文物を体験して北学論を唱えた。朝鮮王朝後期の四大『燕行録』の著者の中、金昌業、洪大容、朴趾源など三人が子弟軍官として使行に参加した

ことも特徴である。この中、洪大容の記録は、書状官の叔父と同行しながら著したものであるが、金昌業、朴趾源の『燕行録』は、公式的な仕事と関係なく自由参加だったため、現存する『燕行録』の中で、もっとも豊富かつ多様な内容が含まれていると評価される。

金昌業が一七二二年の対清使行団に子弟軍官として参加できた経緯については『稼齋燕行録』『往来総録』に記されている。「往来総録」によると、兄の金昌集が冬至使兼謝恩使として任命されたが、金昌集が重病から治った直後であり、随行員が要するというわけで、金昌業が使行団に合流できたと記録されている。^⑫

『稼齋燕行録』は全六巻構成で、一七二二年一月三日、漢城を出発し、二六日鴨緑江を渡江、二月二七日、北京に着き、北京で四六日間滞在し、一七二三年二月一五日北京を出発し、三月二三日鴨緑江を渡り、三月三〇日漢城に着くまでの旅程を記録した。各巻別の内容をみると、巻一は一七二二年一月三日漢城を出発し、同年二月一五日、遼東の寧遠衛に着くまでの記録である。巻二は同年二月一六日、寧遠衛を立ち、二月二九日北京に着くまでの記録であるが、二月三〇日まで記録されている。巻三は一七二三年正月一日の清朝皇帝に対する新年朝賀をはじめ、一月三〇日までの記録で、北京における遊覧を記し、巻四は一七二三年二月一日から二月一四日の北京を発つ直前までの記録で、巻五は一七二三年二月一五日から二月二九日までの記録であり、北京を出発し朝鮮に帰る途中、医巫閭山を遊覧した記録である。そして最後の巻六は一七二三年二月一六日医巫閭山の遊覧と千山見物を終え、一行と合流し、義州を経由し漢城に着くまでの記録である。

三、一八世紀朝鮮における「北学論」・「朝鮮中華主義」

「北学」とは「北方の学問を学ぶ」という意味で『孟子』の記されている楚国出身の陳良が、楚国の北方の周公・孔子の学問を喜んで学んだことから由来する言葉である^⑭。古代において文化が相対的に遅れていた楚国が北側の先進学問を学んだことを意味し、朝鮮王朝が清朝の先進的学問を学ぶことを意味する言葉といえる。朴趾源、朴齊家（一七五〇～一八〇五）、洪大容などの代表的な北学者は、対清使行を経験した人物で、満州族の清朝がたとえ朝鮮王朝が夷狄視していた北方異民族王朝であったが、清朝の施す制度や文物は「中華」に相応しく、こうした先進的な清朝の文物を学ぶべきだと考えた。

洪大容は、叔父の洪楹が一七六五年燕行使書状官として燕京に行った際、子弟軍官の資格で使行に参加し、清朝の名儒の陸飛、嚴誠、潘庭筠などと交友し、特に清朝の天文台である欽天監を訪問し西洋宣教師の劉松齡 (Augustinus von Halberstein) や鮑友管 (Antonius Gogelsl) と出会い、天文曆法に対して議論した。

朴齊家は庶子出身で、朴趾源・洪大容と交友し、一七七八年陳奏使の蔡濟恭の別賚官として、李徳懋とともに清朝に行き、清朝の李調元・潘庭筠などと交友し、燕京の新文物に接した。そして、一七九〇年には進賀使や冬至使行に参加し、一八〇一年にも謝恩使として燕京に行くなど、四回の対清使行に参加し、清朝の新文物を経験した。

そして『熱河日記』を残し、北学派の代表する人物として有名な朴趾源は、一七八〇年進賀使行に参加し燕京に行き、その後「利用厚生」の学問を目指し、「北学議序」において、朝鮮王朝の知識人が清朝を夷狄視することを批判した。彼は、朝鮮の知識人が清朝を北方異民族の王朝という理由で清朝の文物を無視することは結局「中国の良法・制度」をも

無視する誤謬を犯していると指摘した。朴趾源は、中国の良法・制度とは夏・殷・周の三代以来の礼楽文物の継承であり、清朝は漢民族の王朝ではないものの、その礼学文物を継承しており、従って清朝の文物は中華文物であると考えた。なお、清朝の文化は弁髪や胡服の満州族の文化ではあるが、中華と夷狄を区分する基準とは、衣冠ではなく先進文物やシステムであると考えた^⑮。このような清朝の文物を直接体験し、その文物の受け入れを主張した北学派の活動時期は、北学思想とは対極点に立っている「朝鮮中華主義」が全盛を極めていた一八世紀であった。

周知のように、中華主義の理論的根拠は、朱子学的名分論である華夷論であり、儒教文化を持つ存在が中華、そうではない存在を夷狄として分類する世界観である^⑯。そして朝鮮中華主義とは、一七世紀の明清王朝交替により、中華である明朝が滅び、夷狄の清朝が中国を支配することになり、朝鮮のみ礼学文物の国であり、中華王朝の正当性を大報壇の祭祀を通じて継承していると自負し、さらに歴史考証を通じて中国の三代と同じ時期に朝鮮にも礼学文物が存在していたと主張する安鼎福も、この時期に登場した。すなわち、儒教文化において理想社会とみる夏・殷・周の三代の儒教の根本となる洪範九疇を武王が箕子から学び、結局儒教文化の起源は堯・舜の後、箕子が継承し、箕子が東夷において建国した国が箕子朝鮮であるため、明朝の滅亡した時点において朝鮮だけが中華の国であるという論理であろう^⑰。朴趾源はこうした礼学文物に基づき朝鮮中華主義を唱えた朝鮮の儒者について次のように述べている。

彼誠雞髮左衽。然其所拠之地。豈非三代以来漢唐宋明之函夏乎。其生乎此土之中者。豈非三代以来漢唐宋明之遺黎乎。苟使法良而制美。則固將進夷狄而師之。况其規模之廣大。心法之精微。制作之宏遠。文章之煥爛。猶存三代以来漢唐宋明固有之故常哉^⑱。

朴趾源は、清朝の衣冠や風習がたとえ弁髪や胡服であっても、清朝の領域は夏・殷・周・漢・唐・宋・明が起こった中華の地であり、こうした中華王朝の伝統や制度を清朝が継承しているため清朝を夷狄視してはいけず、

以我較彼固無寸長。而独以一撮之結。自賢於天下曰。今之中国。非古之中国也。其山川則罪之以腥羶。其人民則辱之以犬羊。其言語則誣之以侏離。并与其中国固有之良法美制而攘斥之。則亦將何所做而行之耶。²⁰

と、当時の朝鮮の儒者の朝鮮の礼学文物に対するプライドからの清夷狄論に対し、批判的な目線を示している。そして、彼が清朝において直接目撃した先進文物を朝鮮が積極的に受け入れるべきだと主張している。

大航海時代以後、世界の経済は中国の生糸、絹織物類の輸出やその代金である銀の中国吸収という構図で展開され、これにより中国は租税制度を銀納制に変えるなど、莫大な貿易黒字を挙げていた。²¹ 周知のごとく、産業革命に成功し、世界規模で植民地を経営した大英帝国が、膨大な対清貿易赤字をアヘン輸出をもって打開しようとしたことを想起すれば、当時の朴趾源らの北学派が経験した清朝の文物は、礼学文物に基づいた朝鮮中華主義を圧倒し、利用厚生論、科学技術論、農業発展論、海外通商論などが北学派から主張された。ところで、こうした北学派の思想形成には、燕行使行という交流がその根底に存在する。こうした交流の蓄積により、伝統的な朱子学的価値観の中で成長した朝鮮の儒者の思想の中から北学論が浮上できたのであろう。

四・対清使行と情報入手

朝鮮王朝時代の対清使行、即ち燕行使行の回数は、清朝の入関（一六四五年）から甲午改革を行う一八九四年まで六一二回に至る。²² 六一二回派遣された対清使節団は、一般的な規模が三〇〇人程度であり、時には五〇〇人を上回る規模の使節団も存在した。そして一六四五年から一八九四年まで朝鮮王朝から清朝に派遣された使節団の人数は、延べ二〇万人以上であると推測される。なお、使節団の構成員を見ると、儒者の士族から訳官・軍官・医官・士卒・奴婢など上層身分から下層身分までの多様な人が参加した。使行団に参加した人らは清朝との交易、情報入手、文化交流、書籍購入など多様な交流を行い、中国から得た新しい知識を朝鮮に伝える役割を果たした。朝鮮王朝後期対日本使行が定例化し日本の徳川幕府に派遣された使節団である通信使の派遣回数が一二回に過ぎなかったがその通信使が日韓両国に残した膨大な文化的、政治的、社会的影響を考えると、当時の世界の政治、経済、文化の中心であった清朝に派遣された使節団の文化的、政治的、社会的影響は想像のできない膨大なものであると考えられる。

一二月二四日金昌業が薊州に留まる時、康田という秀才が「清朝において何をするのか（你来這裡何幹）」と金昌業に聞いた際、金昌業は「貴国の人と風物を見る（看貴邦人物）」と答えた。²³ このように、金昌業をはじめとする朝鮮の対清使行団は、清朝との多様な交流を通じて清朝に対する情報を入手した。

金昌業は清朝の風習や文化を「山川風俗総録」として整理した。その初の記録は、義州から鳳城までの旅程の記録である。「山川風俗総録」によると、金昌業は鴨緑江の渡江後、清朝の領内の鳳城まで人家がなく、露宿した。²⁴ こうした金昌業一行の露宿は、満州族の発祥地の中国東北地

方に対する清朝の封禁政策のためであり、金昌業の使行のみならず、他の対清使行団の記録を見ても、冬季の使行の際は民家がなく、露宿をして苦しんだという記録がみえる⁵⁵。対清使行の路宿の記事は、鴨緑江の渡江後、民家において宿食が解決できた対明使行と対比される点で、一五七四年の対明使行に参加した荷谷・許銜（一五五一～一五八八）⁵⁶の対明使行録の『荷谷朝天録』にも渡江後、民家に泊まり明らと学問論争を行ったと記録している。「山川風俗総録」には朝鮮から北京の間にある山の名称や特徴、河川の名称、市場の種類、北京城、通州城、薊州城、錦州衛城、山海関城、瀋陽城の大きさや特徴など、清朝の地理情報を記録し、これと共に気候に対する記録も興味深い。金昌業は鴨緑江を渡り、北京に行く路がすべて砂で、遼東に入ってから砂がより細くなり、風が少し吹いたら霧のように飛び散り、後ろの人から前の人が見られないほどだと述べ、こうした砂は風のない日も車の輪から砂が飛び散り、髪や髭に付き、落とせにくく、鶏の尻尾で作ったほうきで絶えず砂を取り、北京の大路では水をまき、砂が飛ぶのを防いだと記録している⁵⁷。

こうした観察の記録と共に、自らの専門知識を生かした使行団の情報収集も目立つ。金昌業の参加した冬至使行団の使行団構成は、正使、副使、書状官のような儒者士族から訳官、医官、画員のような中人階級（専門技術集団）をはじめとして、多くの官奴も参加している。ところでこうした使行団の中から目立つグループがあるが、それは訳官・朴東和、漢学上通事・張遠翼、清学上通事・金世弘、教誨質問通事・劉再昌、年少聰敏・吳志恒、次上通事・朴世章、押物通事・金昌夏、金商鉉、吳泰老、偶語別通見・玄夏誼、清学別通見・韓允普、蒙学・金景興、倭学・崔櫛、蒙学・張齡、清学新通見・崔台相、偶語別差・崔寿昌など、朝鮮王朝時代の通訳官庁である司訳院所属の通訳担当者である『燕行録』巻一、一人馬渡江数。彼ら司訳院所属の通訳担当者らは、自らの語学能力を活用

し積極的な情報収集を行っている。

彼らの中、倭学とは朝鮮王朝において日本語通訳を担当していた倭学訳官を意味し、一般的には日本との交流を担当した通信使行に参加したところで、この倭学が清朝の首都である北京に行く使節団に参加しているのが興味深い。一七二二年の対清使行に参加した倭学・崔櫛は本貫が慶州で、一六七五年訳科に合格した人物である⁵⁸。一七二二年の対清使行は、歴代の燕行使行の中で、その規模が最も大きい使行であり、同時期の通信使行、琉球使行も歴代最大規模であったことは上述の通りである。すなわち、三藩の乱の鎮圧（一六八一）および台湾鄭氏の帰府（一六八三）による一六八四年の清朝の海禁策の解除（展界令）により、東アジアの貿易の活性化がもたらされ、こうした経済の活況に乗り、漢学に比べ相対的に待遇がよくなかった倭学が蓄財のため対清使行に参加した可能性も指摘されている⁵⁹。そして、こうした経済的目的以外にも清朝からの日本の情報の入手、あるいは徳川幕府の実質的な対清使節の役割をはたしていた琉球使節団との接触および情報交換を備え派遣された可能性もある。実際に朝鮮の使節団は北京において琉球使節と頻繁な接触したが、一七八〇年から一九〇〇年までの一二〇年間、二二回北京で接触した記録がある。朝鮮使節と琉球使節は清皇帝の朝礼に備え、鴻臚寺において共に朝礼の練習を行い、清朝廷の主催の宴会に共に参加し漢詩唱和をも行った⁶⁰。

琉球王国は清朝の冊封国の独立王朝だが、一六〇九年の薩摩藩の侵攻により薩摩の附用国となり、江戸幕府に定期的に使節を送っていた。つまり清朝と江戸幕府の両属関係であり、薩摩は琉球に琉球在番奉行を派遣、監督し、琉球から清朝に派遣する進貢使を通じて清朝の情報を入手した。江戸日本と清朝の情報を保持していた琉球使節と朝鮮使節の交流は、秀吉の朝鮮侵略以後、日本の情報収集に積極的であった朝鮮側にとって

重要な情報源であり、朝鮮使節は北京において日本の情報入手に積極的
に臨んだ。

金昌業と燕行使行をともした朝鮮の訳官は、清朝の官吏と接触し清
朝の行政文書も入手しているが〔燕行録〕巻四、一月二十七日(乙巳)首訳・
朴東和、上通事・張遠翼、別湾上・崔寿昌が清朝の兵部の海賊・陳尚義
平定文書や礼部が尊号を求めた文書を手し、金昌業の燕行録にその全
文が載せられている。海賊の陳尚義は広東潮州出身で、元来平凡な民だっ
たが飢饉のため海賊となり、「仁義礼智」と名付けた船一二隻で山東、広
東、浙江、福建、江南など五省の沿岸において活動をし、清皇帝の懐柔
策により、清朝に降伏した人物である。金昌業の燕行録には、陳尚義の
表文や登州鎮臣李雄の上奏、皇帝の秘指が公開されている。このように
対清使節団は清朝の地理、気候、風俗から皇帝の秘指のような機密行政
文書まで手に入れるなど、対清情報収集および対外情報収集に積極的であ
ったことが分かる。

五. 朝鮮中華主義と北学論の交差

一七二二年一月三日漢城を出発した金昌業は同年二月二十七日、北
京に着いた。彼ら使行団が北京に着いて行った初の儀礼は、二月二十八
日の会同館における礼部への表文や咨文を出す表咨文呈納であり、一二
月二十九日には正使以下すべての正官の皇帝謁見(朝参儀)のための儀礼演
習の鴻臚寺演儀も行った。そして正月一日には対清使行団の最も大事な
儀礼である朝参儀を行った。ところで金昌業は清朝において行った表咨
文呈納・鴻臚寺演儀・朝参儀などの北京における儀礼を記す際、清朝と
明朝の儀礼の差を荷谷・許錡が一五七四年聖節使・書状官として対明使
行に参加し記録した使行日記である『荷谷朝天録』を引用し述べている

のが目立つ。これは、明清交替後の朝鮮の知識人が正統中華王朝として
認識した観念化された理想郷の消滅した中華帝国・明朝に対する記憶に
よるものと考えられ、金昌業は清人や漢人を比較観察し、清人と漢人の
風貌や性格に対する記録、清人と漢人の言語使用や認識に対する記録、
清人と漢人の女性の化粧法や風習、清人と漢人の衣服生活に対する観察
記録なども比較的詳しく記しているが、これは清夷狄論および朝鮮中華
主義と表裏をなす観念ともいえるだろう。清夷狄論の立場から金昌業は
清朝に対し、胡人・胡服・胡皇などとして記録している。こうした清朝
に対する認識は、金昌業の清人との交流の場面からもよくみられる。

周知のように、朝鮮王朝の対中国使行団の主な仕事の中の一つは、中
国の儒者との学問交流であった。朝鮮の儒者は中国の最新の学問動向を
調べ、親交を結ぶため中国の儒者と積極的な交流を行った。例えば、金
昌業がよく引用している一五七四年の許錡の『荷谷先生朝天記』には、
鴨緑江の渡江直後から当時の明朝において流行っていた陽明・心学者と
厳しい論争を行い、朱子学者とは学問的連帯感を確認し高く評価するな
ど、明朝の儒者との交流を積極的にしたことが分かる。朝鮮儒者の明朝
儒者との論争は使行期間中続き、こうした明士との学問交流が朝鮮の学
界に大きい影響を与えたのは周知の通りである。ところで、金昌業は清
朝で会った人と談話を通じて多くの情報を得るなど、清朝の事情を調べ
ているが、許錡のような論争を伴う学問交流は見られない。むしろ対等
な学問交流より、朝鮮の衣冠文物を一方的に誇っている金昌業の様子が
目立つ。

金昌業は、神・仏を信仰する清朝の風習や胡服を着、弁髪をしている
清朝の漢人に対し、中華の礼楽文物を継承している朝鮮の衣冠文物の優
越さを継続的に表現している。これは先述したように、一八世紀の朴趾
源が批判した外観としての礼楽文物に基づいた、朝鮮中華主義的プライ

ドであるといえる。明清交替以後、明の滅亡と共に、中華の礼楽文物を継承したのは朝鮮王朝であり、その具体的表象は清朝の胡服や弁髪ではなく、礼楽文物の象徴としての衣冠であると見ていたのである。こうした認識は当時清朝が漢人を含めた被支配民族に強要した弁髪や満州風の衣装、すわち胡服が金昌業をはじめとする朝鮮の儒者の目に「夷狄」として見えたからであろう。

金昌業は鴨緑江の渡江後、鳳城までの露宿を終え、鳳城の民家に入ってから、清朝の文化に対する観察や朝鮮の礼楽文物に対するプライドを記録した。まず、一二月四日鳳城での記録を見ると、鳳城からは村ごとに神廟や寺があり、土地廟は小さい村にもあり、関帝廟は家ごとにあると述べ、

自鳳城以後。有村必有神廟或仏寺。其土地廟則雖數家村。皆有之。小或累石為室。大如斗。中供画像。前置瓦炉焚香。関帝則無家不供。或画或塑。朝夕焚香頂礼。其崇信神仏之風。蓋如此。⁴³

と、清朝の神・仏信仰を否定的に紹介している。こうした中国の道教・仏教信仰に対する朝鮮儒者の拒否感は清朝のみならず、朝鮮の儒者が正統中華王朝と認識し、観念的な儒教の理想郷と考えた明朝を訪れた朝鮮儒者の紀行文にも見える。先述した許篈も

余平日窃怪崔錦南評中国之俗曰。尚道仏崇鬼神。以為中華文物礼楽之所聚。彼遐荒僻村則容或有禱祀之处。而烏有拳天下皆然之理。今而目撃。則斯言誠不誣矣。⁴⁴

と記録しているように、朱子学の国であると自負していた朝鮮の儒者の

目には、中国で流行っている道教や仏教的伝統は批判の対象になった。これは、観念的に理想的中華世界と認識していた中原王朝が、実際には堯・舜時代の礼楽文物を継承していないという乖離によるものである。そしてこうした中国に比べ、儒教的礼楽文物が根を下ろしていた朝鮮に対する誇りの表現と解釈できるだろう。

金昌業の記録と対明使行に参加した許篈の記録とのもう一つ対比される点は、前に述べたように、明朝の心学者との学術論争のようなことなく、金昌業は胡服・弁髪の清朝の風習と比べ、朝鮮の衣装に対するプライドを持って清人に接している記録が多く見える点であろう。

入漢人王五家朝飯。主人年可五十許。言自遼東移居于此。因言遼東即你們住的。見余豹裘在炕上。即取而穿之曰。好好。余問你見俺們冠服如何。曰。好。遂脱帽。指其頭有所言。使申之淳問之。以為渠父亦曾着網巾戴笠云。初称満州人。詰問然後。始告以実。問前後之言何異。則以為先世雖漢人。既為今皇帝所屬人。豈非満州。因言渠方屬八高山軍兵。⁴⁵

一二月一日漢人の王五との対話で、金昌業一行の衣冠に関する問いに、王五は朝鮮の衣冠について肯定的に評価するが、自分は満州族の皇帝が支配している清朝に住んでいるため、自らは満州人であると考えていると語っている。⁴⁶こうした金昌業の朝鮮の衣冠に対するプライドは『稼齋燕行録』の所々において確認できる。一二月一四日の記録にも

三行人察院。余出宿私寓。主人姓劉。問其役。属真黄旗下軍。問海賊事。与王俊公言。大同小異。問此去海幾里。答十余里。問錦州幾里。答六十里。問我輩衣冠如何。曰好看。如吾所着。其可謂衣冠乎。⁴⁷

と、金昌業が一夜泊まった家の大家の柳氏に衣冠に対する自負心を表現しており、一月一日明朝に仕えた官吏の子孫の郭廓菴との対話においても、郭に朝鮮の衣冠に対する感想を聞いている。翌日の一月十九日には、自分の祖先が明朝の万歴初期の千戸であったとする榮琮との対話で

夕飯後。往諸裨所寓處。房屋敞潔。而家主漢人。為人淳善。余問貴姓。答榮。問諱。答琮。問貴庚。答六十。問令郎幾人。答一介。問令郎年幾。答二十五歲。問名甚。答箴。問住此幾年。答祖居十一代。問祖先有官職麼。答不過千戶。問千戶是幾代。仕在何朝。答万曆初年。問我們衣冠。与大国異制。可駭不駭。答老爺們衣冠甚可。愛我明朝衣冠。是這樣。問然則公輩即今衣冠。非旧制否。答我們此時衣冠是滿州^④。

とし、榮琮に朝鮮の衣冠に対する感想を聞いている。そして、清朝の衣装が滿州族の衣装であることが分かりながら、中国の旧制ではないかと聞き、榮琮が滿州衣服と答えさせているのが分かる。こうした金昌業の朝鮮の礼楽文物に対する自負心は清皇帝に対する評価にも繋がる。一月二四日康田とは

纔設要看。我人物文章是東夷。有甚可觀文物。穿的衣冠。与大国異樣。想必見笑。答曰。心愛貴邦衣冠。我這遵時王之制。……大国従前過客儘多。此言蓋指胡皇。而彼不能覺矣。^⑤

と、朝鮮の衣冠に対する自負心と共に清皇帝を胡皇と呼んでいるのが分かる。このように、金昌業の燕行録には清朝の知識人との学的論争は探

しにくく、その代わりに胡服や弁髪姿の清人に礼楽文物を自慢している様子が見える。金昌業が清朝で人質生活をした「斥和論者」の金尚憲の子孫であることを考えれば「清夷狄論」は当然かもしれない。そして、金昌業は、北学者の朴趾源が批判した「外観だけ見て、清朝は昔の中国ではない（以我較彼固無寸長。而独以一撮之結。自賢於天下曰。今之中国。非古之中国也）」と唱える典型的な朝鮮王朝の士大夫のように見える。

ところが金昌業の記録には「朝鮮中華主義」・「清夷狄論」的な記録だけあるわけではない。一月二二日、金昌業は清朝の秀才との対話で朝鮮の衣冠に対する問答をした。

問獐子剃頭。你們亦剃頭。有何分別中国夷狄。答雖我們剃頭有礼。獐子剃頭無礼。余曰。說得有理。你年少能知夷狄中国有別。可貴可悲。高麗雖曰東夷。衣冠文物。皆倣中国。故有小中華之称矣。^⑥

ここで清朝の秀才は、清朝は変髪したものの「礼」があるため中国であり「礼」のない「獐子」とは違うと言い、これに金昌業も同意している様子がみてとれる。つまり礼楽文物の有無による華夷観は、朝鮮中華思想を貫通していることで、東夷に過ぎない朝鮮が中華として自負できるのは朝鮮に「礼」が存在するためであり、その「礼」の表象である衣冠を金昌業が自慢していたのである。しかし金昌業はまた「衣冠」はたとえ弁髪や胡服だが清朝には「礼」が存在するため中国であるという、清朝秀才の話にも同意している。ここでの清朝に存在する「礼」というのは、朴趾源が胡服と弁髪だけで清朝を排撃すると、中国固有の良法と美制も排撃することになると話したその「制度」であろう。つまり、表に見える衣装だけが礼楽文物ではなく、清朝を支える法と制度、儒学的な国家システムも礼楽文物であり、清朝の水才はその点を金昌業に「礼」

と表現した。これに対し、金昌業も胡服と弁髪として代表される「夷狄」としての清朝認識から中華文明の継承者としての清朝認識に同意している様子が見られる。こうした清朝認識は、北学思想の根底にあるものであるが、金昌業の記録からも北学論と類似している見解が見られる。二月六日金昌業は瀋陽を訪れ次のような記録を残した。

自入土城。左右市廛已櫛比。而内城尤繁盛。十倍遼東。入城数百步。東入小巷。密院在焉。有東西廊屋。而庭湫隘。聞訊輩言。通官金四傑之母。曾居此屋。常言此乃丁丑後朝鮮質子人等所接之家。世子館則今衙門是其地云。曾王考所拘之処即北館。而今無知者矣。⁵³

瀋陽は金昌業の曾祖父である金尚憲が丙子胡乱の後、人質として生活していたところで、金昌業は金相憲が拘留生活していた「北館」を尋ねたが、場所が確認できず悔しがつている。周知のように丙子胡乱の敗戦と昭顯世子、鳳林大君、金尚憲をはじめとする朝鮮の人々の人質生活は、その後の大清復讐論と北伐論の原因になるが、こうした歴史の現場である瀋陽における金昌業の描写は精製され、客観性を保っている。そして自分の祖先の流罪地である瀋陽において金昌業は清朝の先進文物に対するより肯定的な記録を残している。

蓋瀋陽城方二里許。而每方各二門。共八門。八門路縱橫貫城中。如井字狀。而南北兩門路。与上東上西兩門之路交界處。皆有十字樓。此処如我國鐘街。人物輻輳。市肆繁盛。始向西行百余步而還。又向北行百余步而還。遂向上東門而去。左右市肆。百貨街耀。百余步間皆堆積。獐鹿兔之懸者。不可勝計。各色工匠。如鉅木造車造棺造椅卓。打造鉄器錫器及薯米縫衣彈綿花之類。種種皆有。而器械無不便

利。一人所為。可兼我國十人之事。⁵⁴

九八

金昌業は瀋陽城の市街地や市に対する描写と共に、当時の清朝の文物の発展の姿が見られる、工場や機械について説明し、こうした機械の発展により、朝鮮より効率が一〇倍もいと感嘆している。

このように、金昌業は目に見える文化の差、つまり衣冠文物については朝鮮の礼学文物に誇りを持っているが、清朝の発展ぶりについても高く評価しているのが分かる。代表的な斥和論者の金尚憲の子孫であり、清朝の胡服や弁髪に対し、文化的優越感を持っていた金昌業の記録に見えるように、北学論は清朝との交流を通じて、清朝を直接体験した人により漸進的に形成されたことが分かる。そして、清朝の文物を認めるようになった要因は結局、儒学的国家システムとしての礼楽文物である。こうした金昌業の清朝に対する考えは、二月七日の記録を見れば分かる。

且建夷東夷之種性本仁弱。不嗜殺人。而以康熙之儉約。守汗寬簡之規模。抑商賈以勸農。節財用以愛民。其享五十年太平宜矣。至若治尚儒術。而能尊孔朱。躬修孝道。而善事嫡母。則雖比於魏孝文金主雍。無媿矣。⁵⁵

ここで金昌業は、清朝の康熙帝の治績により、たとえ目に見える外観は夷狄であるが、儒教や学問の奨励、愛民政治などによって、現在の清朝の発達した文物と太平を成したと結論付けている。先述した清人の秀才が「礼」があれば中国であると言ったことと一脈相通するもので、朝鮮は東夷であるが朝鮮に礼楽文物が存在するため小華だと考えているように、満州族の清朝は弁髪をし、胡服を着ているが、康熙帝の儒教奨励や孔子と朱子の崇尚、勸農および儉約は礼楽文物であり、これによって

金昌業は清朝を評価できるようになったと考えられる。

六. おわりに

歴史的に中国とその周辺国を天下と認識する華夷観念の下にいた東アジアの知識人たちに一七世紀に明清王朝の交代は、明朝の建国で成立した東アジアの「中華的国際秩序」の解体を意味した。これは「中華」である明朝が「夷狄」である清朝によって滅亡し、天下から中華が消滅した事件であった。朱子学的理想国家を目指した朝鮮の儒者はもちろん、一七世紀から儒学・朱子学を積極的に導入した日本の儒者はこうした一連の事件以後、朱子学的に新しく解釈した華夷論を出した。日本においても中国よりは徳川日本に礼楽文物が存在したという山鹿素行(二六五二～一七一二)・熊沢蕃山(一六一九～一六九二)・山崎闇斎(一六一九～一六八二)学派・垂加神道派などの一連の思想家が清夷狄論を前面に出した日本中華主義を主張した。⁵⁶⁾ 光海君政権を倒し政権に就いた朝鮮の仁祖政権の親明路線は、中原進出を図っていた清朝にとって背後の脅威と見なされ、一六二七年と一六三六年の二度の侵略を招き、清朝の武力に屈服した朝鮮王朝は清朝を中心とする朝貢冊封秩序に編入されるが、観念的には「清≡夷狄」、「朝鮮≡中華」論が胎動する。

ところで、明朝滅亡後、清朝がむしろ全盛を極めると、朝鮮の儒者は「夷狄」の全盛について新たな解釈を下さなければならなかった。こうした状況の中で、朝鮮では二つの思想が登場するが、一つには中国の三代と同じ時期に朝鮮にも対等な礼楽文物が存在したことを歴史的に考証し、中華の正統が中国のみならず、朝鮮でも存在するという安鼎福として代表される「朝鮮中華主義」である。またもう一つの思想的流れは、清朝がたとえ朝鮮が「夷狄視」していた北方民族王朝ではあるが、清朝

が施している制度や文物は「中華文物」であり、このような先進的な清の文物を学ばなければならないという、朴趾源、朴齊家、洪大容として代表される「北学論」である。

こうした「朝鮮中華論」を主張した安鼎福と「北学論」を主張した朴趾源、朴齊家、洪大容の活動時期より先立った一八世紀初めに、清朝を直接訪問し、「稼齋燕行録」を残した金昌業の清朝に対する認識は、「朝鮮中華主義」と共に、清朝の先進文物を認める「北学論」が交差し、共存している。金昌業が使行中見せた礼楽文物に対する自負心、すなわち小中華意識は、一般的に朴趾源、朴齊家、洪大容などの北学者とは違った思想的閉鎖性によって、朝鮮の近代的な発展の妨げになったと評価されてきたが、こうした北学論者の考えた清朝の先進文物に対する観察や学習意志は金昌業にもあった。そして朝鮮中華主義的思想も

我国之服事大明二百有余年。及壬辰再造之後。則以君臣之義。兼父子之恩。大明之所見待。我国之所依仰。無異内藩而非他外夷之可比也。⁵⁷⁾

という洪大容の書信からも分かるように、北学者にも共有されていた。丙子胡乱当時、斥和論を主張し、清朝において長い捕虜生活を送った金尚憲の直系である金昌業は、朝鮮の礼楽文物の優越性を誇りながらも「対清復讐論」の代わりに清朝の実用的文物については肯定的な認識を持っていた。

通説では明清交代後、朝鮮後期の知識人の対明義理論と北伐大義論、そして文化自尊意識つまり「朝鮮だけが唯一の中華」であるという意識が強化された朝鮮中華主義は、北学派の登場により衰退したと説明しているが、⁵⁸⁾ 一八世紀の朝鮮は伝統的な朱子学的価値観と衣冠・風習という

礼楽文物の自負心から来る朝鮮中華主義と、清朝の先進文物を学ばなければならぬという北学が、それぞれ全盛を極め、混在する時代であったといえる。そして北学論はある日いきなり登場した思想ではなく、対清使行などによる情報入手、清朝との交流および先進の文物に対する体験や認識が蓄積され、一八世紀後半、漸進的に現われた思想として理解するのが合理的であろう。

注

- ① 本論文は『稼齋燕行録・燕行録選集Ⅳ』（民族文化推進会、一九七六）を基本テキストとして分析した。本テキストは筆写本であるソウル大学校奎章閣所蔵本を底本とし、表紙書名は「稼齋燕行録」、毎冊の巻頭書名は「老稼齋燕行日記」とされている。本論文は表紙書名に従い「稼齋燕行録」として表記し、本文の引用の際は「燕行録」として表記する。そして、本稿における引用史料の旧漢字は新漢字に書き換えた。なお、本論文の韓国語論文の引用の場合、著者・題目は日本語に翻訳して表記したことを付記する。
- ② 四大「燕行録」の中、最も後代に記録された金景善の『燕軒直指』にも、朝鮮王朝時代の代表的「燕行録」として金昌業・洪大容・朴趾源の「燕行録」を取り上げ、金景善自身も彼らの「燕行録」を参考・引用している。
- ③ 李章佑「稼齋燕行録解題」『燕行録選集Ⅳ』景仁文化社、一九七六、二二頁。
- ④ チェ・ソザ「一八世紀金昌業・洪大容・朴趾源の中国認識」『明清史研究』三二二号、二〇〇九。
- ⑤ イ・ハクダン「金昌業の明末清初の戦争記憶」『東方漢文学』六〇号、二〇一四。
- ⑥ ジョン・ヘジュン「朝鮮士大夫の清国首都北京見聞・金昌業の『稼齋燕行録』を中心に」『明清史研究』二三号、二〇〇五。
- ⑦ ソ・イ「金昌業と清朝文士の交友に関する考察」『淵民学誌』一三三号、二〇一〇。
- ⑧ ハ・ジョンシク「歪な肖像・朝鮮支配層の康熙帝像」『学林』三九号、二〇一七。
- ⑨ ソン・ミリョン「一八世紀朝鮮知識人の見た清朝の統治」『明清史研究』二三号、二〇〇五。
- ⑩ 李章佑「稼齋燕行録解題」『燕行録選集Ⅳ』景仁文化社、一九七六、七頁。
- ⑪ 李章佑、前掲論文、一〇頁。
- ⑫ 荒野泰典「近世的世界の成熟」『日本の対外関係・六』吉川弘文館、二〇一〇、三〇八頁。
- ⑬ 壬辰六月二十三日政。伯氏為冬至兼謝恩使。時伯氏大病新瘳。子弟一人宜随往。且吾兄弟。皆欲一見中国。於是叔氏欲行。已而止。余乃代之以打角。啓下。一時譏謗譁然。親旧多勸止。余諛諧曰。孔子微服過宋。為今世通行之義。吾何独不可乎。聞者皆笑。（『燕行録』卷一、往來総録）
- ⑭ 吾聞用夏變夷者、未聞變於夷者也、陳良楚産也、悦周公仲尼之道、北学於中国、北方之学者、未聞或之先也。（『孟子』滕文公章句上）
- ⑮ キムインギユ『北学思想研究』シンサン、二〇一七、三〇〜三二頁。
- ⑯ キムインギユ、前掲書、一八一〜一八二頁。
- ⑰ 鄭玉子「朝鮮後期朝鮮中華思想研究」一志社、一九九八、一六頁。
- ⑱ 池斗換「朝鮮時代思想史の再照明」歴史文化、一九九八、二七九〜二八二頁。
- ⑲ 『燕巖集』卷七、別集、鍾北小選、北学議序。
- ⑳ 同前
- ㉑ 朝尾直弘編『日本の近世・一―世界史の中の近世』中央公論社、一九九一、一三二〜一三五頁。
- ㉒ イ・チオルソン「通信使と燕行使の比較研究」『通信使・倭館と韓日関係』景仁文化社、二〇〇五、八四〜八五頁。
- ㉓ 夕有一秀才入來。余邀坐炕上。問姓名。答賤姓康。名田。字惠蒼。問我何姓。答賤姓金。仍問你来這裡何幹。答看貴邦人物。（『燕行録』卷三、十二月二十四日癸酉）
- ㉔ 自義州至鳳城為二站。無人家露宿。自鳳城至北京為三十一站。皆有察

院。自鳳城至遼東。謂之東八站。（『燕行録』卷一、山川風俗総録）

②⑤ こうした、渡江の後、露宿をした記録は金昌業と共に燕行使として清朝に訪れた崔徳中の『燕行録』日記、十一月二十六日（二七二二）及び、李岬『燕行記事』上、十一月二十八日（一七七七）、朴趾源『熱河日記』渡江録（一七八〇）、金正中『燕行録』奇遊録、十一月二十四日（二七九二）、金景善『燕轅直指』出疆録、十一月二十一日（一八三二）などの記録にも見える。

②⑥ 許筠は大徳寺において藤原惺窩と交流史、藤原惺窩の思想形成に影響を与えた山前・許篈の弟である。

②⑦ 李豪潤「一六世紀朝鮮知識人の『中国』認識・許筠の『朝天記』を中心に」『コリア研究』二二号、二〇一。

②⑧ 自渡江至北京。地皆沙。自入遼野。往来車馬益多。沙益細。乍風輒揚。状若烟霧。後人不見前人。関内尤甚。雖無風日。輪蹄間触。起者如灰揚。着人衣帽面目。頃刻變色幻形。同行幾不能相識。在鬢髮者。拭之不脫。在口中者。漸溼有声。至十襲之籠。重封之瓶。亦皆透入。極可怪也。市肆及人家所置器物。用鷄尾帚。不住拭。不然。頃刻積至寸許。北京城大街。皆濺水以浣之。（『燕行録』卷一、山川風俗総録）

②⑨ キム・ヤンス「朝鮮後倭館訳官『訳科榜目』の分析を中心に」『歴史と実学』三七、二〇〇八、九三頁。

③⑩ 荒野泰典「近世的世界の成熟」『日本の対外関係六』吉川弘文館、二〇一〇、三〇八頁。

③⑪ キム・ヤンス、前掲論文、一二一頁。

③⑫ 紙屋敦之『琉球と日本・中国』山川出版社、二〇〇三、六六―六七頁。

③⑬ 旧例。入京翌日。使以下具公服。奉表咨文詣礼部。先行見官礼於尚書訖。使奉咨文跪告曰。国王咨文。尚書命受之。復曰。起来。然後使起退出還坐歇。所令通事呈表文于儀制司後。使以下歷往主客儀制。兩司行礼而罷。出荷谷朝天録今則尚書或侍郎与郎中具服。面南立于大庁。大通官引三使。奉表咨文跪進。郎中受。安于卓子上。通官引使以退。（『燕行録』卷一、表咨文呈納）

③⑭ 旧例。演朝賀節儀於朝天宮中門内。搥大鼓則千官以朝服分東西。魚貫而入。使以下随之。鳴鞭齊班。樂作行四拜而跪。通政司鴻臚寺等官前奏慶

賀。節次畢。又行四拜而跪。搯笏起舞。又跪呼万歳者三。又起行四拜而罷。出象院題語、荷谷朝天録。今則使以下正官三十員具公服。詣鴻臚寺牌閣前八面高閣内設御榻。奉安位牌。牌面以金字書當今皇帝万歳万歳万万歳。演儀。三使為一行。居前。堂上官以下至押物官二十七員。分為三行。從職品。每行九人。排班列立。鴻贊二人立于左右。臚唱一時行三跪九叩頭。如或參差。則雖三四巡。更加演習後許罷。（『燕行録』卷一、鴻臚寺演儀）

③⑮ 旧例。見朝日五更頭。使以下具公服詣闕。憩于午門外。日將出。五鳳樓上擊鼓撞鐘。殿前鳴鞭三声。内外齊班。皇帝出御皇極門。今則視朝於皇極殿。而皇極改名太和。千官入於皇極門庭。使与十三省差來官。班於午門之前。使臣序於各官之末。典序於呈文礼部。依会諸国使臣之上。一行立於監生之前。少焉。午門三門尽闕。鴻臚寺序班。引使以下到御路上。行五拜三叩頭礼。遂由右掖門而入。文武官東西相向。糾儀御史。列於中庭。使以下就其後而立。十三省官入見畢。序班引使以下。跪于御路上。鴻臚寺持揭帖跪奏曰。朝鮮国差來陪臣某姓名等幾員見。使以下行三叩頭而後跪。皇帝親發玉音曰。与他酒飯喫。使以下復三叩頭。序班引出。還由右掖門詣光祿寺。喫酒飯而罷。出荷谷朝天録今之節次。与旧無異。而礼数則三跪九叩頭。外国例序於西班牙之末。而我国使以下。皆序於諸国使臣之上。一品使臣則引上殿内。坐於五等諸侯之末。啜茶而出。或值正朝日太平宴之時則東西班一品外。皆宴床。諸国使臣一行。只給一床。而我國三使。各給一床。大通事以下三人。並給一床。（『燕行録』卷一、朝參儀）

③⑯ 清人貌豐偉。為人少文少文。故淳實者多。漢人反是。南方人尤輕薄狡詐。然或不尽然。清人亦入中国久。皇帝又崇文。故其俗寢衰矣。（『燕行録』卷一、山川風俗総録）

③⑰ 清人皆能漢語。而漢人不能為清語。非不能也。不樂為也。然不能通清語。於仕路有妨。蓋闕中及衙門。皆用清語。奏御文書。皆以清書繙訳故也。閩巷則滿漢皆用漢語。以此清人後生少兒。多不能通清語。皇帝患之。選年幼聰慧者。送寧古塔學清語云。官員之行。一騎持坐席在前。蓋以坐席。別其品級高下故也。大小人員遇皇子。皆下馬。閣老以下否。（同前）

③⑱ 漢女皆傅粉。胡女則否。旧聞漢女有夫。雖老皆傅粉簪花。今不見尽然。閩外女多美者。（同前）

- 39 漢女避人。清女不避人（同前）
- 40 男女衣服。勿論奢儉。其色尚黒。而漢女不然。穿青紅袴者多。（同前）
- 41 李豪潤、前掲載論文
- 42 朝鮮王朝前期における明儒との交流が及ぼした朝鮮儒学界の影響については尹南漢『朝鮮時代の陽明学研究』（集文堂、一九八二）を参照されたい。
- 43 『燕行録』卷二、十二月四日癸丑
- 44 『荷谷先生朝天記』万歴二年甲戌八月十三日甲寅
- 45 『燕行録』卷二、十二月十一日庚申
- 46 漢人王五は八高山軍兵に属していると記されているが、彼は漢軍八旗である可能性もある。従って、この記録は、先代はたとえ漢人ではあるが、自分は八旗として皇帝の下に居るため、満州人となったとの解釈も可能であらう。
- 47 『燕行録』卷二、十二月十四日癸亥
- 48 其中一人。举止稍雅。年可四十余。自言是廩庠生。遂延坐炕上。問其姓。答姓郭字廓菴。問廓菴是表德是号。答諱如柏。号新甫。以字為号。以号為字。有未可知也。問先祖有官職否。古明指揮同知。問幾代。答十世。問俺們衣冠。你見可笑否。答各朝制度。（『燕行録』卷二、十二月十八日丁卯）
- 49 『燕行録』卷三、十二月十九日戊辰
- 50 『燕行録』卷三、十二月二十四日癸酉
- 51 『燕行録』卷二、十二月十二日辛酉
- 52 「獐子」とは朝鮮において韃靼つまりモンゴル民族を指す言葉だが、北方民族全体を指す言葉に変わった言葉である。
- 53 『燕行録』卷二、十二月初六日乙卯
- 54 同前
- 55 『燕行録』卷五、二月七日乙卯。
- 56 日本中華主義および日本型華夷思想に基づいた対外認識については桂島宣弘「華夷」思想の解体と国学的『自己』像の生成『思想史の十九世紀——他者』としての徳川日本』ペリかん社、一九九九。桂島宣弘「華夷思想の解体と自他認識の変容——一八世紀末期—一九世紀初頭期を中心に」

『自他認識の思想史』有志舎、二〇〇八を参照されたい。

57 『湛軒書』内集、卷三、答韓仲由書

58 ウ・ギョンソプ『朝鮮中華主義の成立と東アジア』ユニストーリー、二〇一三、二二頁。

〈参考文献〉

史料

「稼齋燕行録」（『燕行録選集Ⅳ』民族文化推進会、一九七六）

「燕巖集」（『燕巖集』民族文化推進会、二〇〇四）

「湛軒書」（『湛軒書』民族文化推進会、一九八九）

「孟子」（『孟子』高麗ワンプックス、二〇〇五）

「荷谷先生朝天記」（『燕行録選集Ⅰ』民族文化推進会、一九七六）

韓国語文献

李章佑「稼齋燕行録解題」『燕行録選集Ⅳ』景仁文化社、一九七六。

尹南漢「朝鮮時代の陽明学研究」集文堂、一九八二。

鄭玉子「朝鮮後期朝鮮中華思想研究」一志社、一九九八。

池斗煥「朝鮮時代思想史の再照明」歴史文化、一九九八。

ジョン・ヘジュン「朝鮮士大夫の清国首都北京見聞—金昌業の『稼齋燕行録』を中心に」『明清史研究』二三号、二〇〇五。

ソン・ミリョン「一八世紀朝鮮知識人の見た清朝の統治」『明清史研究』二三号、二〇〇五。

イ・ Cholソン「通信使と燕行使の比較研究」『通信使・倭館と韓日関係』景仁文化社、二〇〇五。

キム・ヤンス「朝鮮後期倭館訳官『訳科榜目』の分析を中心に」『歴史と実学』三七、二〇〇八。

チェ・ソザ「一八世紀金昌業・洪大容・朴趾源の中国認識」『明清史研究』三二号、二〇〇九。

ソ・イ「金昌業と清朝文士の交友に関する考察」『淵民学誌』一三三号、二〇一〇。

ウギョンソプ「朝鮮中華主義の成立と東アジア」ユニストーリー、二〇一三。

イ・ハクダン「金昌業の明末清初の戦争記憶」『東方漢文学』六〇号、二〇一四。
 ハ・ジョンシク「歪な肖像・朝鮮支配層の康熙帝像」『学林』三九号、二〇一七。
 キム・インギユ『北学思想研究』シンサン、二〇一七。

日本語文献

朝尾直弘編『日本の近世・一―世界史の中の近世』中央公論社、一九九一。
 桂島宣弘「『華夷』思想の解体と国学的『自己』像の生成」『思想史の十九世紀―「他者」としての徳川日本』ぺりかん社、一九九九。

紙屋敦之『琉球と日本・中国』山川出版社、二〇〇三。
 桂島宣弘「華夷思想の解体と自他認識の変容―一八世紀末期―一九世紀初頭期を中心に」『自他認識の思想史』有志舎、二〇〇八。
 荒野泰典「近世的世界の成熟」『日本の対外関係・六』吉川弘文館、二〇一〇。
 李豪潤「一六世紀朝鮮知識人の『中国』認識―許筠の『朝天記』を中心に」『코리아研究』二二号、二〇一一。

(ソウル基督大校助教授)